

場所を見つめ直す ——台湾社区营造の多様な実践

渡邊 泰輔

一 はじめに

私は、「海域アジア・オセアニアプロジェクト」により、2022年9月1日から9月13日までの間、数人の教員と大学院生と共に台湾を訪れ調査を行った。台湾を北から南まで巡りながら音楽、建築、新移民、食など各自の研究関心のある箇所立ち寄った。その中で私が調査したのは、「社区营造」と呼ばれる運動についてである。「社区」とは英語の community の訳語で日本語ではコミュニティ／共同体／まち等と訳され、「社区营造」でまちづくりを意味する¹。

今回の調査の目的は、社区营造の実践と2022年現在の台湾人が持つ社区营造への印象を調べることだった。具体的には、日本統治期に作られた水利インフラを中心とした農業地域の台中市新社区と、客家が多く住む屏東県佳冬郷における社区营造について調査を行った。また、高雄市美濃では社区营造にも関わった現地研究者とディスカッションを行い、社区营造の現状を教えていただいた。

この調査報告では、その経験を踏まえて台湾の社区营造を整理し紹介することが目的である。そのためにまずは、社区营造が盛り上がった1990年代の時代性に注目したい。

二 社区营造の時代性、理念、方法論

そもそも「まちづくり」とは何だろうか。その形は多様だが、日本で行われている環境保護や観光事業のように、共通するのはその場所の個性を大切にするという姿勢だろう。実際に台湾の社区营造はそのような日本のまちづくりに影響されてもいる [簡 2007: 132]。しかし、台湾で「台湾らしさ」を強調することは当然のことではない。そこには現在まで続く

¹ 中国本土でも社区は存在するが、その性質は台湾とは大きく異なる [cf. 河合 2013: 第五章]。本稿で扱う社区は台湾のものに限られる。

台湾の複雑な歴史が関係している。

1949年から1987年までの38年間、共産党との国共内戦に敗れ流れてきた国民党が戒厳令を敷いたことで、台湾では言論の自由が剥奪されていた。この時、国民党は自らを正統な中国政府と位置付けていたため、(中国とは異なる)台湾文化は日本統治時代に続き厳しく抑圧されることになった。さらに、長い国民党独裁期は経済発展と引き換えに深刻な環境問題、生活様式の劣化を引き起こしていた。

そんな社会状況のなか、1970～1980年代になると、都市で反体制運動、環境運動が草の根で盛り上がった。都市での運動が収束すると、その余波は台湾各地のコミュニティ＝社区へと伝播し、それまで抑圧されていた人々が文化や環境の修復・保存など身の回りの問題に主体的に取り組むようになった [簡 2007 : 122]。こうした運動は「社区营造」と呼ばれ、1990年代に盛んになった。

国民党政府への抵抗運動として始まった社区营造だったが、台湾の民主化・本土化が進むと、むしろ政府にとって重要な運動となった。1989年に台湾史上初の野党である民主進歩党が誕生し、1990年には李登輝(国民党)が史上初の台湾出身の総統に就任したように、1990年代は政治体制も大きく変わろうとしていた。特に李登輝は、台湾のアイデンティティを押し出し、「生命共同体」としての国家建設を目指した。つまり、この時期は台湾政治の場においても、国民党独裁期の反動から中国とは異なる「台湾らしさ」が大きな問題となっていたのである。草の根の社会運動から始まった社区营造は、時代の流れの中でこうした大きな政治と結びついていく。住民主体の社区营造こそが、台湾人としてのアイデンティティを形成するのに重要だと捉えられたのだ。そして、李登輝政権期の1994年には社区营造を推進する「社区総体营造」政策が実施された。そこには台湾人の主体性と市民社会の構築という理念が打ち出されているが²、他にもそれまでなかったまちづくりの方法論が提示されていた。

社区総体营造において、社区は行政区分の「里」を最小単位として申請される(ただし、社区自体は行政区分ではない)。承認されると、(写真1)のような「社区発展協会」と呼ばれる中間団体が設置され、行政から資金を調達し活動が行われる。活動の内容は年ごとに評価され、それにより資金の増減が決まる。社区营造が政治的イシューとして発見されたことで、この外部資本という選択肢が生まれ、自力での活動に限界がある地域に力を与えたので

² 台湾の市民社会論における社区营造については河口 [2010] を参照。

ある。



写真 1 社区發展協會の例³（台中市東勢区）（2022年9月7日、筆者撮影）

三 社区營造の広がり共通点

コミュニティを意味する社区は、台湾では国民党独裁期からの人々の主体性と台湾らしさの形成という理念に結びついていた。確かに社区総体營造にはその理念が書き込まれており、抑圧された台湾文化の表出は政治の場でナショナリズムと捉えられ得る。しかし、当然ながら社区營造の全ての担い手が民主化の理念を体現しようとしているとは言えない。むしろ、社区総体營造の理念や方法論が転移した様々な実践があり、それらを総称する形で「社区（營造）」という一般名詞が存在するといった方が正しいだろう⁴。つまり、社区營造

³ 写真1の「社区」については以下を参照
<https://community.society.taichung.gov.tw/introduce/Details.aspx?Parser=99.5.28....16413....423..403>（2023年3月4日閲覧）。

⁴ 紙幅のため割愛したが、社区関連政策の複雑さも理解を妨げている。そもそも社区関連政策の始まりは国民党独裁期の1960年代に行われた「社区發展」政策に遡る。そこでは、国民党によるインフラなどのハード面への「上から下」の開発政策が行われていた。1990年代以降の「社区総体營造」政策は、その反動として住民主体の「下から上」の運動であることが強調された。この対比だけなら分かりやすいのだが、実際には両者の政策が並行して行われているだけでなく、近年では「農村再生計画」や「地方創生」などの政策が新たに加わったことで、社区營造と言った時にどの政策と関係しているかが分かりづらい。

には、社区総体营造政策のもと行われる狭義の社区营造と、政策とは直接関係なく行われる住民主体の活動全般を指す広義の社区营造があるのである。

従って社区营造には目的の異なる非常に多くの実践が含まれるが、大なり小なり共通しているのは、その活動の過程で住民がしばしば自分たちの住んでいる場所に向き合い、それまで意識することのなかった地域の歴史や文化を再発見していく点である。以下では、台中市と高雄市で見聞きした事例から、そうした社区营造の営みの一端を紹介したい。

四 統治の歴史の資源化——台中市新社区における社区营造

新社区は、台湾第二の大都市である台中市の中心から車で一時間ほど行った場所にある市轄区である。区の東側には大甲溪という大きな河川が流れ、それを水源とした農業地帯が広がっている。この大甲溪から新社の台地へと水を供給しているのは、「白冷圳(はくれいしゅう)」という日本統治時代に作られ用水路である。台湾でサトウキビの生産増大に取り組んでいた日本は、各地で養成所を設置した。新社区の養成所(写真2)もその一つであり、白冷圳は新種のサトウキビの苗の生産に必要なとなった大量の水を賄うために建設された。



写真2 旧大南養成所(現・成果展示室) (2022年9月8日、筆者撮影)

台湾では日本統治時代に幾つもの灌漑施設が建設された。その中には八田與一の作った嘉南大圳のような有名なものもあるが、白冷圳は長らく注目されることはなかった。ところが2000年代以降に白冷圳を文化遺産化する動きが急に活発となり、建築主任だった日本人

技師・磯田謙雄の出身の金沢市との交流も生まれている。この全くの無名だった日本統治時代のインフラから文化遺産への転換に大きな役割を果たしたのが、被災の経験と社区营造だった。

1999年9月21日、台中市を含む台湾中部は未曾有の大地震（通称：九二一地震）に見舞われた。1932年に完成し戦後も使われ続け老朽化が問題となっていた白冷圳は、この地震により決定的なダメージを受ける。一時は廃棄も検討されたが、新型の電気モーターを使った用水路は資金面・実用面からも現実的でなかった。すると、住民の一部から白冷圳に使われている自然の地形を生かした「逆サイフォンの原理」はコスト面でも優れており、また白冷圳自体には新社台地の開拓の歴史と結びついた文化的価値があるため、修復すべきという提案がなされた。こうして、白冷圳の復旧と文化的価値の発信を目的とする社区营造が始まった [林 2015 : 24]。

白冷圳を中心とした社区营造の中心となったのは、「促進会」（正式名称：社團法人臺中縣新社鄉白冷圳社區總體營造促進會）という団体だった。促進会は白冷圳の修復計画にも携わりながら、次第にその文化的価値の発信をしていった。しかし、資金面・人材面の不足に悩んでいた促進会は、当初から政治家や研究者と連携しながら活動を行っていた。促進会にとっては、彼らが重要な外部資本だったのである。では、社区营造の結果は具体的にどのような形で現れているのか、今回の調査で訪れた場所から紹介したい。

調査では養成所や取水口などを巡ったが、中でも白冷圳の技術的目玉である「逆サイフォン方式」が見える白冷圳記念公園は、ここの社区营造にとって象徴的な場所だと言える。「逆サイフォン方式」とは、噴水や谷を越える時などに使われる技法で、水面より低い場所を経由して水を送る仕組みである。白冷圳にはこの技法が三箇所採用されているが、なかでも二号逆サイフォン（写真3）は世界的に見ても巨大なものであり、白冷圳の技術的価値を象徴している。さらにこの二号逆サイフォンが見える白冷圳記念公園には磯田謙雄の銅像（写真4）が建てられており、側にある橋には「日台友好の橋」（写真5）と刻まれている。ここから分かるように、白冷圳では技術だけでなく日本統治時代の歴史がその文化的価値を支える重要な要素となっている。このようにかつての支配者である「日本」の要素を再発見し、文化的資源として活用することは、国民党独裁期にはできなかったことだ。これは、社区营造の結果であり、民主化の影響でもある。



写真3 二号逆サイフォン（2022年9月8日、筆者撮影）



写真4 磯田謙雄像（2022年9月8日、筆者撮影）



写真5 日台友好の橋 (2022年9月8日、筆者撮影)

五 文学・社会運動・教育——高雄市美濃区における社区营造

台湾の南にある高雄市美濃区は、社区营造も絡んだダム反対運動で有名である[星 2013]。私も当初はこのダム反対運動を中心に聞くことになると考えていた。しかし、私が現地の人に案内されたのは、客家の生活を描いた鍾理和という作家の記念館(写真6)だった。なぜ文学館に案内されたのか、最初はその理由が分からなかったが、展示内容を見るうちにその理由が分かった。



写真6 鐘理和記念館・外観（2022年9月10日、筆者撮影）

鐘理和記念館は二階建ての建物で、一回は鐘理和の足跡を辿る展示が置かれていた。ガイドを務めてくれたのは、鐘理和の実の息子で記念館の現館長だった。説明によれば、鐘理和は、日本統治時代、国民党独裁期と強権的政治により自由な創作活動が行えない中でも自らの身の回りの生活を書き続けた。1980年代になり民主化の流れが生まれると、「台湾文学」として彼の作品の評価も上がり、映画化もされた。記念館には、政治的動乱の中で書き続けた鐘理和の足跡と、彼を支えた妻の愛情について展示されていた。

2階へ上がると、そこには記念館の成り立ちと、ダム反対運動を含めたこの地域一帯の社

会運動の歴史が展示されていた。館長が強調していたのは、この記念館が台湾で初めての行政の支援を受けずに建てた文学館だという点だった。最初なのは民間の文学館というだけではない。ここには他にも、「笠山文藝營」（南方で初めての文学者グループ）、「台灣文學歩道園區」（初めての台湾作家の文学の道）、「旗美社區大學」（初めての農村型社区大学）という四つの「初めて」が存在した。順に簡単に説明しよう。まず、「笠山文藝營」とは、毎年テーマを掲げて2泊3日でそれに関する討論を行う活動のことを指す。テーマは客家文化や生態文学など多様である。「台灣文學歩道園區」は、日本でもあるような、作家の作品と景観を結びつける活動である。館長氏によれば、石川啄木の文学の道に影響を受けたという。どのような経緯で啄木の話が伝わったかは、調べる価値がありそうだ。最後の「旗美社區大學」にある社区大学とは、民間で組織された開かれた教育機関のことで、狭義の社区营造と関係している。その中で旗美社區大學は、それまでの都市にあるものとは違う農村型のものとして台湾で最初だった。校舎などは存在せず、空いている場所で授業を行う。生徒も大人が多く、教師と生徒という関係ではなく、教え合い学び合う関係だという。

では、これらの活動とダム反対運動はどのように関係しているのだろうか。館長によれば、ダム反対運動をする際の拠点となったのがこの記念館だという。実際に彼は、2階の窓から見える自然を指し、「ダムができれば、この自然は全てなくなっていた」と説明してくれた。そして、ダム反対運動で培った社区营造のノウハウは、社区大学を建設する際に多いに役立ったという。さらに、この社区大学の発足には鐘理和基金会の助けも加わっており、ここからもこの記念館の重要性が伝わってくる。

以上から、美濃の社区营造においては「文学」が中心となっていたことが分かる。厳しい言論弾圧の時代の中で身の回りの生活を描き続けた鐘理和の存在が、この場所の社区营造の源となっていたのだ。政府に頼らないその姿勢は後に、ダム反対運動や社区大学へとつながり、彼の作品は文学の道として自然と溶け合っている。

六 課題と展望——社区营造は終わった？

今回の調査で私が訪れた台中市新社区と高雄市美濃区は、ともに社区营造の活発な地域だった。新社区では被災を期に白冷圳に目を向けるようになりかつての統治者である日本の要素が積極的に表象され、美濃では台湾文学とそれに大きく影響された社会運動や教育が民間で行われていた。活動の内容やプロセスは違えど、そこに共通するのは、住民が自分

たちの生まれ育った場所について考え活動したということだ。それは、日本統治時代や国民党独裁期にはできなかったことであり、民主化の流れと、住民の主体的な社区营造の結果である。台湾におけるまちづくりには、このような深く長い文脈広がっているのだ。

最後に、社区营造がいまどの様に受け止められているかを現地の研究者（X氏）へのインタビューから紹介したい。X氏によれば現在（2022年9月）の台湾では社区营造という言葉は良い印象を持たれないという。それは狭義の社区营造の仕組みと関係している。社区营造の理念は地元住民が自分たちの住む場所の問題関心に主体的に取り組むことにあったが、実際にはそこに住んでいない人も行政に対し社区を申請できる。X氏によれば、社区营造が流行する中で、申請を手伝う代わりに分前を要求する守銭奴のような部外者が増え、社区营造に対する負のイメージが付いてしまったという。そのため、現在では社区营造に変わって地方創生政策が2019年から始まった。文化事業に重点を置く社区营造に対して地方創生では就業機会の創出など経済的側面が重視されている。今回の調査はちょうど中秋節と重なっていたのだが、出店の中には地方創生を利用した若者によるドライフルーツの店があった。

では、地方創生によって狭義の社区营造も広義の社区营造も取って代わられたのだろうか？ 私の考えでは、そうではない。むしろ広義の社区营造の中に新たに地方創生という側面が加わったと考えるべきだ。なぜなら、社区营造はいまだに行われており、地方創生と重なるところは多いからである [石井・佐藤・長谷川 2020 : 126]。また、大陸中国と台湾の複雑な関係は現在も続いている。その中で、「台湾らしさ」に目を向ける社区营造の営みはこれからも研究し続ける価値がある。

謝辞

本調査は、人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業「海域アジア・オセアニア研究プロジェクト」の共同調査の中で行われた。共同調査では、河合洋尚先生(東京都立大学)、横田浩一先生(人間文化研究機構・東京都立大学)、奈良雅史先生(国立民族学博物館)、そして大学院生の田井みのりさん(東京都立大学)、神宮寺航一さん(東京都立大学) 田村あすかさん(東京都立大学)と共に行動した。調査員ごとにテーマは異なり、筆者は社区营造を担当し、本調査結果を得た。

河合先生、横田先生、奈良先生、神宮寺さんには通訳の面で非常に助けていただいた。またここでは名前を挙げていないが、台湾でも多くの人に貴重なインタビューをさせていた

だいた。ここに感謝の意を申し上げる。

参考文献

- 石井大一郎・佐藤綾香・長谷川万由美 2020「台湾における社区まちづくりの展開と人材育成——1994年以降のまちづくり政策：社区营造三期と台湾版地方創生に着目して」『宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要』8：113-30。
- 河合洋尚 2013『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。
- 河口充勇 2010「台湾における市民的公共性の構築を巡る学術と政策の動向——陳其南の「公民社会」論とその政策的実践を手掛かりに」藤田弘夫編『東アジアにおける公共性の変容』東京：慶應義塾出版会、pp.77-102。
- 簡子晏 2007「民主化の担い手としての社区運動——歴史的発展の分析と諸類型」西川潤・蕭新煌編『東アジアの市民社会と民主化——日本、台湾、韓国にみる』東京：明石書店、pp. 120-172。
- 星純子 2013『現代台湾コミュニティ運動の地域社会学——高雄県美濃鎮における社会運動、民主化、社区総体营造』東京：お茶の水書房。
- 林慧真 2015『災難与社区発展——台中市白冷圳流域社区総体营造促进会之研究』長栄大学硕士学位论文。
- 和田清美 2014「台湾における社区营造研究の課題——コミュニティ形成・まちづくりの日台比較研究のために」『都市政策研究』8：27-48。

(わたなべ・たいすけ 東京都立大学大学院)